



# JSSH NEWS

## 日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会  
広報・渉外委員会

### 第57回日本手外科学会 学術集会開催にあたり — Let's meet in Okinawa —

第57回日本手外科学会学術集会

会長 金谷文則

(琉球大学大学院医学研究科整形外科学講座)

#### 目次

- 第57回日本手外科学会学術集会開催にあたり
- 物故会員への追悼文  
(Harold E. Kleinert先生を偲んで)  
(南條文昭君を偲んで)  
(Lee W. Milford先生を偲んで)
- 2013年度JSSH-ASSH  
Traveling Fellow報告記
- ハンドギャラリー(生田コレクション7)  
「おしゃべりな手」
- 第4回手外科医のリスクマネジメント  
「手外科開業医のrisk management  
—私の場合—」
- 委員会報告
- お知らせ
- 編集後記

第57回日本手外科学会学術集會を平成26年4月17日(木)～18日(金)の2日間にわたり、沖縄コンベンションセンターで開催させて頂きます。本学会会長に推挙して頂いてから教室の総力を挙げて準備に取りかかっています。沖縄県で本学会が開催されるのは平成8年に茨木邦夫琉球大学名誉教授の開催につき2度目になります。沖縄はアジアの中心に位置しており、本学会の沖縄開催により沖縄から世界レベルの研究・技術をアジアに発信し、アジア地区全体の医療の発展につながることを期待しております。

今回の学術集會のテーマは“standing on the shoulders of giants”としました。Sir Isaac Newtonが好んで使った慣用句“If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants.”で有名です。現在の医学や科学の到達点は、先達の業績の上に積み上げられたものであり、私たちはこの到達点の上に乗ってさらに遠くを見ることができると考えています。今回の学会では、現在の到達点を明らかにするとともに、手外科の今後の発展について討論しその成果によりthe shoulders of giantsが少しでも高くなり、手外科を志す若手がより遠い水平まで見渡すことができれば望外の幸せです。今回のシンポジウムやパネルディスカッションとして橈骨遠位端骨折を含む手の外傷、変性疾患、先天異常、またいわゆるcommon diseaseと考えられていましたが、最近研究が進んだ狭窄性腱鞘炎やテニス肘などを考えております。さらに斬新な研究、リサーチや稀な症例

報告については、口演に加えてポスター討論も行います。フロアでの議論を深めて頂きたいと考えています。Best presentationやBest poster awardも準備いたしますので、奮ってご参加下さい。そのほか、最近診断精度の向上が著しいECHOや手術機器のワークショップを企画しております。特別講演として私の恩師である齋藤英彦先生と吉津孝衛先生、招待講演として米国からTsu-Min Tsai先生、Jesse B Jupiter先生、韓国からGoo Hyun Baek先生、ランチョンセミナーは11題で国外では台湾からYuan-Kun Tu先生、米国からWilliam B Geisler先生、スイスからDiego Fernandez先生を予定しております。

私は故田島達也教授のもとで手外科を学び、たくさんの同門の皆様到手厚い指導を頂きました。1957年の日本手外科学会創設以来、新潟においては第4回(故河野左宙先生)、第15回(故田島達也先生)、第45回(吉津孝衛先生)、第53回(柴田実先生)が開催され、「田島手の外科」の流れをくむここ沖縄でも第39回(茨木邦夫先生)が開催されております。今回、沖縄で本学会を開催させて頂き誠に光栄に存じます。私が本日あるのも国内外の先輩、同僚そして若手のおかげであり、皆様に感謝するとともに、現在の手外科をより高いレベルで後輩に託してゆきたいと考えております。沖縄の4月は「うりずん」と呼ばれ最も快適な季節です。多くの皆様に沖縄にお集まり頂き、手外科の現在と未来を語りましょう。沖縄でお待ちしております。

# 物故会員への追悼文

## Harold E. Kleinert 先生を偲んで

新潟大学形成外科 柴田 実



Harold E. Kleinert, MD.FACS  
(October 7, 1921 - September 28, 2013)  
玉井 誠 先生 ご提供  
Kleinert Kutz Hand Care Center

Kleinert先生が昨年10月のASSHの直前、92歳の誕生日を迎える一週間前の9月28日に亡くなられました。

Kleinert Kutz Hand Care CenterのFellow担当のTien先生からの最新情報ではこれまで日本から24名の先生がFellowとしてお世話になっています。私は1984年7月から1987年4月までの2年10ヵ月間Christine Kleinert Fellowとして所属しました。最初の1年半はResearch、次の1年はClinical、最後の2ヵ月間はオフィス派遣のTravelling Fellowとしてヨーロッパの手の外科医を歴訪する機会を頂きました。

Harold E. Kleinert先生はFellowを含めた、オフィススタッフの間では親しみを込めてHEKと呼ばれていました。Fellowに対しても気さくに接して下さい、私の狭いアパートで開いた少人数のささやかなpartyにも気軽に来てくださり、食事を喜んで頂いたことも忘れられない思い出です。

先生は193cmの長身で、肩幅は広く、細身で肩はいからず、少しかがみ込んだ姿勢で話し相手の目を見つめ、ときには相手の肩に手を置いて、どんな人にも分け隔てのない話し方をする人でした。先生の髪は少なめで、グレー、顔は面長で良く笑い、いつでも上質のユーモアで反応され、慈愛に満ちた面持ちの人でした。深みのある、ゆっくりと、西部風の母音を伸ばした話し方は特徴的で、Fellowには上手にこれを真似る者が何人も居ました。先生は常にゆったりと構えられて、声を上げて怒る様なことは決して無く、常に自信のある口調で話をされましたが傲慢な感じは全くありませんでした。時間をかけて患者の手を取って、丁寧に診察するばかりで無く、患者の心配、訴えはもちろんのこと仕事や家族の話までも良く耳を傾ける人でした。朝8時から午後5時までの予約患者を診終わるのは深夜になってしまうことも少なくありませんでした。こうした先生の説明を受けた患者からは比類無き信頼を受けていました。

先生の労働倫理観は誰も真似が出来ないので、一週間にオフィスまたは病院の滞在時間は平均で120時間と言われています。睡眠の取り方についての異能ぶりも有名ですが、手術患者入れ替えのわずかの時間でも空いたストレッチャーに俯せになって熟睡している姿を見かけることは日常茶飯事、Fellowの手術を見に来て話が途切れるとその背中に寄りかかりながら居眠りし、寄りかか

られた重さで気づいたFellowに起こされたという話もよく知られています。

先生のご両親はともにドイツからの移民の子供で、父AmylはMichigan、母ChristineはIowaの出身で、小さな農家の4人兄弟の次男として1921年10月7日にMontana州Sunburstの近く、Dry Teakettleで生まれています。三男Alanはそこに生涯残って父の仕事を継ぎ、農場を随分と大きくしています。

先生はまだ医学生だった1943年の6月15日に徴兵(第二次世界大戦)されましたがPhiladelphiaのTemple Universityを卒業し、1946年にDetroit一般外科のレジデントとして戻り、1953年に外科のSurgical InstructorとしてLouisvilleに移っています。

Zone II 屈筋腱の一次修復の成績を一変させた術後他動運動療法は先生の業績として手の外科医で知らない者は居ませんが、先生の最初のFellowで、60年余り一緒に仕事をしてきたKutz先生が1967年のASSHで発表した成績を信じられない人が多く、LouisvilleにASSHからの調査団が派遣された話は余りにも有名です。

Kleinert先生の業績を挙げるとdouble operating roomの開発、1976年のASSH会長、1995年のIFSSH Pioneer選出などがありますが、最も特筆すべきは1960年に設立したChristine Kleinert Fellowshipであり、これまでアメリカ国内および58の国から1300人以上の手の外科医を育て、更にその人達を介して、今日活躍している莫大な数の手の外科医を育成したことであります。

残されたご家族は奥さんのSharon、6人の子供、14人の孫、12人の曾孫がいらっしゃいます。

ここに、偉大な師、Harold E. Kleinert先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

## 参考文献

1. Lister G.D. : In Memoriam Harold E. Kleinert, MD October 7, 1921–September 28, 2013. J Hand Surg 38A, 2013
2. Stern P.J : First Hand: Harold E. Kleinert, MD: A Tribute and Personal Reflections. J Hand Surg 39A, 2014, 118–119

# 南條文昭君を偲んで

山内裕雄

永年、本会会員であった南條文昭君が2013年9月に他界されました。彼は目立つことを避け、黙々と仕事をした人でしたから、通常の追悼記ではなく、こんな男が日本手外科学会にいて、こよなく手の外科を愛していたという、いささか型破りな思い出の記を書かせて戴きます。まず私が捧げた弔電をご披露します。

南條文昭君 いや南ちゃん 君の訃報に 若き日々の貴重な一頁が秋風に飛ばされちゃったような悲しみで一杯です 君にも去られてしまったのかと お互い駆け出しの医者だったころ 新設間もない虎の門病院で御巫部長の下で研修しましたね 声が大きく 金ラッパといわれた 包容力ある親分の下での楽しい日々でした その反対に 消え入るような声で真剣に診察し 小さな綺麗な字でカルテを記載していた君は 親分とは対蹠的でしたが お二人の勉学ぶりには大きな刺激を受けました そんな君が我々のマドンナと結婚されたのには心底驚きました 爾後幾星霜 職場は異なれど君のはにかむような笑顔と真剣さは不変でした 素晴らしい人生を送られました 安らかにお眠り下さい

私は1957年東大整形外科に入局、南條君は1年後輩でしたが、私は入局直後にミシガン大学での外科系研修のため渡米し、2年後に帰局しましたので、東大整形外科では彼のほうが1年早くローテーションに組み込まれていました。一緒に勤務となったのは1960年からの1年間、上記のように虎の門病院でした。二人とも東大手の外科班所属で、時まさに日本の手の外科黎明期でもありました。でも、手に限らず整形外科一般をとともに真剣に学びました。弔電のマドンナとは、宮田光代外来看護主任でした。彼女はなんと当時のJBJS米国版でZimmer社の広告に選抜され、紙面を飾っていた若きナースでした。じつに快活・聡明な。いまだに若々しい面影を残している南條夫人のご許可を得てその広告頁を転載します(図1)。

その後、彼は関東労災病院、東大、東大分院、都立墨東病院、虎の門病院とまわり、整形外科から転じて、1975年虎の門病院形成外科部長となり、1993年退職後も同病院形成外科嘱託として手の外科を中心とした臨床に携わってこられました。

日本手外科学会では1974年から評議員、1998年から特別会員となり、保険点数委員会・プログラム委員会などの委員としても貢献されました。手の外科領域では多数の業績がありますが、1991年に医歯薬出版社から上梓された単著の「手診療マニュアル」は彼の多年に亘る臨床経験をもとにして、分かりやすく書かれた好著です。「まえがき」に「高度で専門的な知識や技術習得以前に、手をじっくり見つめる、あくまで基本を忠実に守ることが手の外科の第一歩である」と記されてい

ますが、これが彼の一生を通じての確たる信念だったと思います。

静かな、患者さん思いの、深く広く勉強し、臨床を大切にした医師、そしてよき家庭人。時に見せる、はにかむような笑顔 (図2)。すばらしい男でした。君と巡り会えたことはわたし一生の誇りであり、幸せだったなと思っています。南ちゃん。安らかにお眠り下さい。



図1



図2

# Lee W. Milford 先生を偲んで

慶應義塾名誉教授 矢部 裕



日本手外科学会名誉会員、米国Campbell Clinicのチーフスタッフで、hand serviceのdirectorであったLee Watson Milford先生には、2013年11月22日、69年間の最愛の妻Bettyさんの手を握ったまま、安らかに昇天された。享年91歳とのことである。

Milford先生はCampbell Clinicで整形外科のレジデンシを終えた後、Los AngelesのJoseph Boyes先生のもとで手の外科を学んだ。1951年Campbell Clinicへ戻り、スタッフとして、手の外科の研鑽を重ね、多くの業績を重ねるとともに、かの世界的な名著Campbell's Operative Orthopaedicsの中のHandの項を担当し、モノグラフとしても発刊した。

Milford先生のもとには、米国内はもとより世界中から大志を抱く多くの若い外科医が集まった。日本からも多くの手の外科医が訪問したのみならず、Campbell Clinicを訪れた整形外科医まで先生のお世話になった。1969年には慈恵医大の室田景久教授(当時は助教授)と私が留学した。Milford先生は高潔で、凛とした気品が感じられたが、人柄は素晴らしく、南部の人らしく暖かかった。しかし、手外科の指導に関してはかなり厳しく、手の手術のセッティングから始まって、彼の本の中に書いてある手順と異なるとひとつひとつ直された。

Milford先生は1968年、広島大学津下健哉教授が主催された第11回日本手の外科学会にguest speakerとして来日されたのが最初である。1974年第17回日本手の外科学会が慈恵医大伊丹康人教授のもとで開催されたのに引き続いて、第1回日米手の外科合同会議が東京、新潟、広島、京都で開催された。当時米国手の外科学会会長であったMilford先生には、その団長として、40名の一流米国手の外科医とその夫人同伴で来日され、それぞれ熱心な討議がもたれ、これを機会に日米手の外科の交流は一段と深まることとなった。1987年、第30回日本手の外科学会で会長室田教授が、そして1990年、第33回日本手の外科学会で私がMilford先生を招聘し、米国手の外科学会の歴史と現状、私は当時発足したばかりの米国手の外科学会専門医制度added qualificationについて講演していただいた。また、室田会長の時にMilford先生から日手会会長用のハンマーが贈られ、代々の会長に引き継がれた。更に続いての交流とご教授が、日本手外科学会の発展に寄与するところは大きかった。

Milford先生は、1982年第25回日本手の外科学会時に、山内裕雄会長から日本手の外科学会名誉会員に推挙された。また、1995年にはIFFSHよりPioneer of Hand Surgeryとして推挙されている。

Milford先生、有難うございました。お蔭様で日本手の外科学会も順調な発展を遂げることができました。

退職後はノープルで人なつっこいBetty夫人やその家族達と造園、パン作りやbird watchingなど多趣味で幸せな生活を楽しまれた。

(資料のご提供をいただいた順天堂大学名誉教授山内裕雄先生に深謝いたします。)

#### 参考資料

- 1) IFSSH ezine, February 2016, 7 : Lee Watson Milfodt, M.D. by James R. Urbaniac
- 2) Remembrances of a Hand Surgeon, by Lee W.Milfodt, M.D., B.S., M.S.
- 3) 日本手の外科学会記念雑誌「20世紀の手の外科 — 21世紀への飛躍を期待して」





# ASSH Traveling Fellow報告

埼玉成恵会病院・埼玉手外科研究所 加藤直樹

2013年9月15日から10月13日までの1ヵ月間、2013年度JSSH-ASSH Traveling Fellowとして、東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センターの越智先生と共に、米国の手外科に関する主要な施設を訪問させて頂く機会を得ました。今回、ASSHの学術集会の前にAnn ArborのUniversity of MichiganとRochesterのMayo Clinicを1週間ずつ滞在し見学致しました。そこで前半の2施設および学術集会に関しては私が、後半の施設に関しては越智先生が報告致します。

## 【University of Michigan】

数多くの手外科に関する教科書や論文を執筆されているKevin Chung先生は形成外科を背景とした手外科医であり、日本同様、手外科医の大多数が整形外科を背景としている米国の中で、Michigan大学は比較的稀な施設であると思われます。日本以外からもFellowの先生が定期的に来られているようで、実際に私達が訪問していた期間中にも、ヨーロッパから見学に来られていた先生が2名居られました。外来と手術見学、研究室案内と1週間をフルに使って、ほとんど全ての施設を見学させて頂きました。Michigan大学の優れた点は臨床と研究が密につながっており、新しいアイデアが浮かぶと、その論文の意義、実現性、対費用効果などを検討し、価値があると判断されると直ちに研究プロジェクトがスタートします。データ採取を担当する人、統計を担当する人と、それぞれの専門家が同施設に在籍しており、彼らが自分達の担当領域を流れ作業のように進めていきます。とにかく、論文作成の為に構築された、その合理的なシステムには本当に驚くと同時に、年間30本から40本論文を作成すると言われたのも納得出来る気がしました(図1)。



図1：University of MichiganでKevin Chung先生と。  
左から越智先生、PortlandのTraveling Fellowの先生、  
Kevin Chung先生、著者。

## 【Mayo Clinic】

2週目はRochesterのMayo Clinicを訪問致しました。ここでは私達が興味をもっている末梢神経損傷、腕神経叢損傷を中心に見学させて頂きました。Rochesterという街はいわゆる小さな田舎町なのですが、Mayo Clinicを中心に発達した街で、病院と街がskywalkや地下道で連結されています。冬は豪雪地帯らしく、車や地上の乗り物が麻痺してしまうので、こうした街の構造になったとのことでした。ここでAllen Bishop先生とAlexander Shin先生、David Dennison先生に大変お世話になりました。Michigan大学同様、朝は基本的に早くから仕事が始まります。だいたい6時過ぎからconferenceが始まり、そこではHand Fellowの先生が中心となってpresentationするのですが、スライド作製から話し方までしっかりとトレーニングを受けられており、全ての発表が立派なものでした。よく、日本人の先生は知識も技量も申し分ないが、発表になるとダメで…ということを知りますが、これは英語力だけの問題でなく、こういったトレーニングをきっちり受けていないことが大きな理由の1つであると思われました。「鉄は熱いうちに打て」じゃありませんが、若いうちにこうしたトレーニングを行うことの重要性を今更ながら感じました。Mayo Clinicは、医師を始めとした医療関係者が如何に快適に仕事出来るかということを第一に考えて運営されています。医師はそれぞれ独立した部屋を割り当てられているだけでなく、手術室の傍にも医師のデスクがあり、院内LANにアクセスしてちょっとした手術の合間にも仕事出来るようになっています。術中の写真やビデオは専門家が在籍しており、呼ぶと直ちに手術室に来て完璧な写真を撮ってくれます。休憩場所などの食事や飲み物サービスなどは全て無料で提供されています。また、これはMayoに限った話ではありませんが、米国には医師のサポートをするPhysician Assistantという国家資格をもったNurseが存在し、彼女達が処方、処置、予約、検査などを全て担当されてテキパキと患者さんに対応していきます。昔、英国に留学していた時にも思いましたが、医師が医療に専念できる環境が当たり前のように存在するシステムが本当に羨ましく思えました(図2)。



図2：Mayo Clinicの先生と。中段左Allen Bishop先生、中段右から2人目Alexander Shin先生、中断右Robert Spinner先生。前段右、越智先生、左、著者。

## 【ASSH Annual Meeting in San Francisco】

本学会のBunnell Luncheonで発表することがTraveling Fellowとしての義務となっており、他の国のTraveling Fellowの先生と一緒に発表させて頂きました。越智先生はFascicular constriction and surgical treatment of spontaneous posterior interosseous nerve palsyという演題で、私はTendon transfer for peripheral nerve palsy to reconstruct upper limb functionという演題で発表させて頂きました。これらの他に予め申し込みが必要なinstructional courseにも参加したのですが、朝から夕方までセッションは密に組まれており、休憩もほとんどなく、夕方には頭が飽和しているような感じになりました。日手会同様、症例報告はほとんど無く、しっかりと系統だった研究の講演ばかりで勉強になりました。

今回、Traveling Fellowとして訪問した先々で多くの手外科医と交流を深める事が出来ました。特に日手会の代表として行かせて頂いたお陰で、全ての施設で手厚くもてなして頂き、日本と米国の医療システムの違いなど、多くのことを学ぶことができました。今回の経験を今後の私達の医療に役立てるとともに、これからの日本手外科学会のお役に立てればと思っております。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて頂きました理事長の落合直之先生、国際委員会の柴田実先生を始め委員の皆様、日本手外科学会の皆様、ご一緒させて頂いた越智先生に心より感謝申し上げます。また不在の間をサポートして頂いた埼玉手外科研究所の皆様はこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。

# 2013年度JSSH-ASSH Traveling Fellow報告記

東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センター 越智健介

JSSH-ASSH Traveling Fellowとしてアメリカの7施設を訪問させて頂きました。諸事情により幸運にも10月最終週までの滞在を許されたことから、最後の2週間半は私一人での訪問となりました。簡単ですが、後半の5施設について報告させて頂きます。

## ● Hospital for Special Surgery (New York, NY)

手術室だけで100以上あるという、極めて大規模な病院でした。外来は富裕層の方が多いようでしたが、小さいながらも貧困層用の外来があるのには驚きました。Weiland先生やWolfe先生といった高名な先生が、若手やわれわれの意見も積極的に取り入れながら治療されている姿に大きな感銘を受けました。Weiland先生一押しのお寿司屋さんやWolfe研究室の定期懇親会にも連れて行って頂き、とても楽しい1週間を過ごしました。

## ● Shriners Hospital for Children (Philadelphia, PA)

Kozin先生を3日間訪問しました。このグループの病院は数年前まで治療費が完全に無料だったと教えられ、アメリカの懐の深さに驚きました。ちょうど開催されていたハロウィンパーティーを覗いたり、テンプル大学の研究室を見学させて頂いたり、Kozin先生お気に入りのイタリア料理店に連れて行って頂いたりと、とても楽しい時間を過ごしました。この訪問の様子はASSH Weekly Member Updateにも取り上げられ、感激しています。

[http://www.assh.org/Members/MCT/Pages/wmu\\_102513.aspx#volunteer](http://www.assh.org/Members/MCT/Pages/wmu_102513.aspx#volunteer)



Weiland先生(左端)、Wolfe先生(右端)や  
スタッフとの夕食会



Kozin先生(右から二人目)と手術室にて  
スタッフとの夕食会

● Massachusetts General Hospital (Boston, MA)

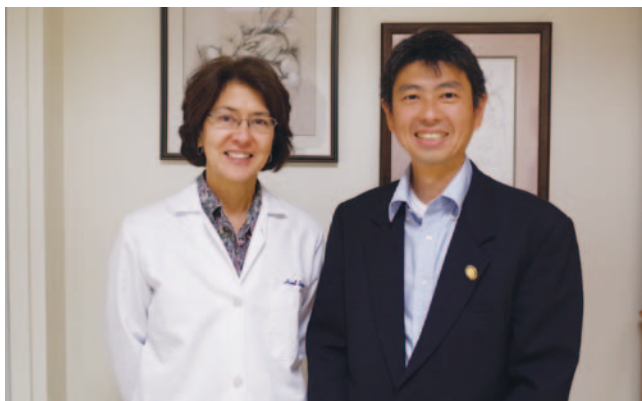
親日家のRing先生のゲストルームに泊めて頂き、2日間訪問させて頂きました。ここで特に印象的だったのは、この病院を慕って集まっている世界各国のvisiting fellow達です。ここでは主と彼らと共に行動したので色々な話ができたのですが、若いフェロー達が抱いて留学している姿に大きな感銘を受けました。ボストンに留学中の整形外科医の会に参加させて頂けたことも、刺激的な体験でした。タクシーの中でドルが足りないのに気づき、日本円で強引に支払ったのも今では笑い話です。



Jupiter先生(中央)と手術室にて

● Texas Scottish Rite Hospital for Children (Dallas, TX)

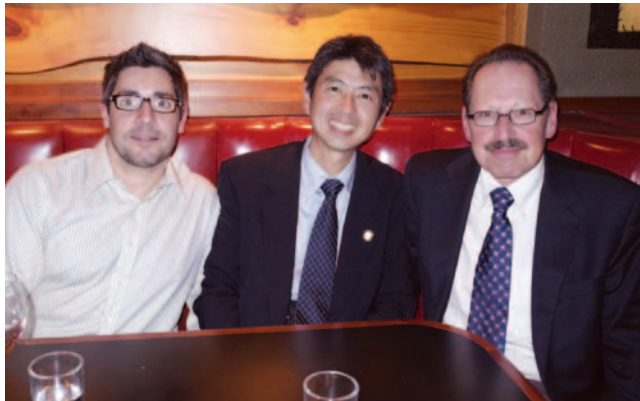
Ezaki先生を2日間訪問しました。ここのスタッフはEzaki先生とOishi先生という、日系人のお二人です。Ezaki先生はニコニコ顔で「ここは日手会のテキサス支部よ」と仰っていました。病院内のスイートに泊めて頂いたり、Ezaki先生ご夫妻一押しのアメリカ料理店に連れて行って頂いたり、とても楽しい時間を過ごしました。Kozin先生とEzaki先生の小児に対する接し方の違いも興味深く、とても勉強になりました。



Ezaki先生と筆者

## ● University of California, Davis (Sacramento, CA)

親日家のSzabo先生を2日間、訪問しました。整形外科スタッフ全員に対して1時間のGrand Round talkをさせて頂いたり、神戸大から留学中の先生にラボを案内して頂いたり、cadaverを用いた解剖実習を見学したり、地域のJournal Clubで発言を求められたり、Szabo先生お手製のカクテルを賞味させて頂いたり、Szaboご夫妻一押しのレストランに連れて行って頂いたり、とても楽しい時間を過ごしました。またEzaki先生がご紹介下さったJames先生 (J. Bone Joint Surg.のDeputy Editor) も親しくして下さい、ご自分のShriners Hospital for Children (Northern California) をわざわざ案内して下さいました。



Szabo先生 (右端) とフェローとの夕食会

## トラベリングフェローを終えて

ホストの先生はみな親切かつ教育的で、多くのことを楽しく学ぶことができました。ご高名な先生がどん欲によりよい治療法を追求されている姿はとても刺激的で、魅力的でした。訪問したどの施設でも歓待され丁寧に扱って頂いたのは一重に、日手会の諸先生が今日まで積み重ねて来られたご功績の賜物であると感じております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

今回多くの施設を訪問させて頂いたおかげで、アメリカにも様々な施設があることも実感できました。信じられないくらい恵まれた施設があるかと思えば、手術室が少ない施設やレジデント不足に悩んでいる施設もありました。与えられた環境の中で、如何に自分の信じるシステムを構築していけるかが一番大切だと感じました。

手術に関しては、日本の手の外科医はアメリカに決して負けていないことを実感しました。日手会の諸先生に教えて頂いたことを礎に、これからも努力して参りたいと思います。

講演は3分から1時間まで合計8回の機会を頂き、「神経束のくびれを伴う特発性後骨間神経麻痺」を中心に話をして参りました。JSSH-ASSH Traveling Fellowとして話させて頂いたこともあり、多くの先生が興味を持って下さいました。また個人的に話してみると、くびれ症例の経験をお持ちの先生が複数いらっしゃることも分かりました。真の交流のためには、個人的なコミュニケーションが如何に大切かを実感しました。また10か国以上の国からアメリカを訪れている、大志を

抱いた若い手の外科医達と親しくなることもできました。アメリカはもちろん、世界中の手の外科医と交流することで、これからの日本手外科学会と手の外科学の発展に少しでもお役に立てればと願っております。

最後になりましたが、一生に一度の素晴らしい機会を与えて下さいました理事長の落合直之先生、国際委員会の柴田実先生、別府諸兄先生、副島修先生をはじめ委員の皆さま、日本手外科学会の皆さま、頼もしい先輩で相棒の加藤直樹先生に心より感謝申し上げます。またこのプログラムに快く送り出して下さった東京女子医科大学附属膠原病リウマチ痛風センターの山中寿教授、桃原茂樹教授、猪狩勝則准教授はじめセンターの諸先生、私をこれまでご指導下さった慶應義塾大学医学部整形外科学教室の戸山芳昭教授、上肢班の矢部裕名誉教授、堀内行雄先生はじめ諸先生に深謝致します。

## 手は語る ハンドギャラリー（生田コレクション7）

# おしゃべりな手 Chatty Hand

広島手の外科・微小外科研究所 生田 義和

今回は、「おしゃべりな手」のふたつの世界のお話をしようと思います。

右の写真は、かつて私が第37回日本手の外科学会を広島で主催した折に記念写真集として出版した24枚のシリーズの中の一枚である。題は「愛撫」。撮影したのは宮崎のあるホテルのロビーでした。この彫刻では男性の左手が女性の股間に横から入り、この部分だけを見ると卑猥な感じを受けるが、男女二人の全体像としては、愛撫し合う二人の均整のとれた彫像であり、作者の意図を理解出来るし、それなりの迫力もある。彫像における手の扱い方のひとつであろう。



さて、私たち手の外科医が、手の機能の再建で目標とするのは、手の基本的な機能であるGrasp, Key Pinch, Tip Pinch, Hook, Pushなどの動作を可能にすることを意識していると思う。その場合には、一つの指関節の可動域を犠牲にしてもその指全体としての安定性を得るとか、あるいは力仕事での疼痛の緩和の為に手関節を固定するなどが治療方針として許される場合もある。しかし、数は少ないが一部の人にとっては、これらの方針が必ずしも正しくない事がある。例えば指の形で商売する競りを生業とする方や、手話を必要とする聴覚障害者では手の基本的な機能と同時に手の型が重要である。下関の「フグ」の競りでは、見えない袋の中で形作られた手によってのみ商談が進むそうである。

一方「手話」では、例えば、一般の人が「何か大きい」という事を相手に伝えようとする時に両手を左右に広げて表現することがあるが、それはそのまま「大きい」という手話になり、親指と人差し指をくっつけてワッカを作るとお金を意味し、親指は男、小指は女、などのように私たちは意識なく手話を使っている場合がある。しかし、手話には音声言語とは違う特徴もいくつかある。例えば、「歩く」を例にとってみると、手話では手を下に向けて人差し指と中指を交互に動かすのが「歩く」という意味である。

この動作をゆっくりすると「ゆっくり歩く」、早くすると「早足で歩く」というように、同じ手話でも動きによって意味が変わって来たりする。この「歩く」の時に、もう一方の手を使って「傘」を表せば、「傘をさして歩く」になり、両手を使うことで同時に二つの異なる単語を組み合わせて使うことも可能である。



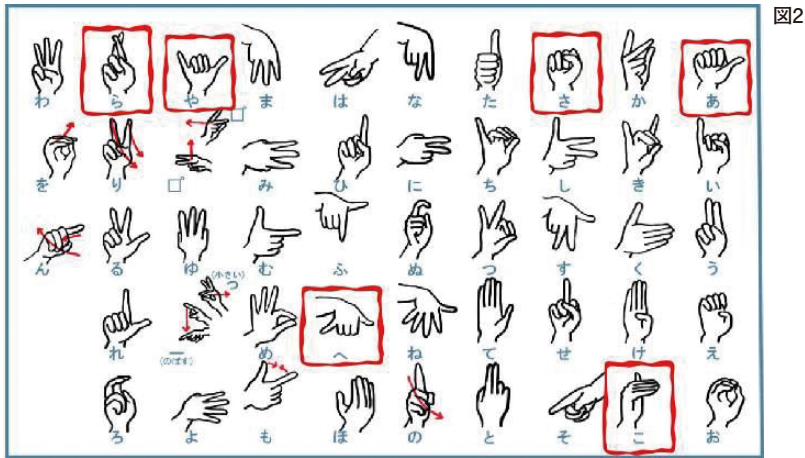
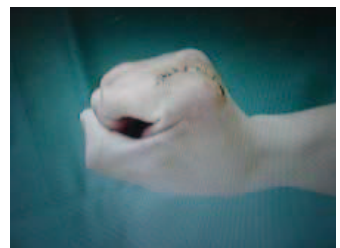
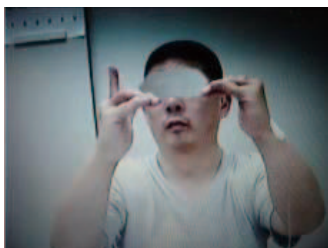


図2

ところで、手話と呼ばれている動作の範疇には、一方の手の指の形の組み合わせで50音の一つ一つを表現できる「指文字」というものがあり(図2)、手話にそれなりの単語がない場合や、一字一句正確に伝えたい時などに使われている。この場合に問題となるのは、母指のIP関節を含めて殆どすべての指関節が文字の表現に使用されている事である。例えば「あ」と「さ」では、母指のIP関節の屈曲が出来ないと区別が出来ず、どちらの文字か不明瞭になる。MP関節の可動性も重要である。

ここで、私たちが新生児の時から長年治療してきた1人の患者について、お話ししたい。この子の生下時の写真(図3-1)でお判りのように、両手の尺側3指の合指症で、示指は独立しているがMP関節の尺側に三角指節骨(delta phalanx)が入り込み、撓側偏位が認められる。生後2歳のとき尺側3指の分離手術と三角指節骨の切除を行った(図3-2)。時は過ぎ、最初の治療から38年後に、私が現在勤務している病院に来院してきた。理由は、彼が在籍している特別支援学校で手話を教える先



上の段の左から右に、(図3-1) 2歳、術前。(図3-2) 手術。両手示指MP関節の三角指節骨を切除。(図3-3) 学童期。下の段の左から(図3-4) 39歳、右手示指のMP関節が屈曲出来ないで、「こ」が表現できない。(図3-5) 示指MP関節のスワンソン・インプラント挿入術。(図3-6) MP関節屈曲可能になり指文字を表現できるようになる。

生となったが、正しい手の形が出来ないので困っている。何とかならないかとの訴えである。すなわち、右示指のMP関節が伸展位で拘縮しており、指文字の中で幾つか出来ない形があるとのこと。本人の具体的な説明によると「こ」(母指以外の全ての指をPIP関節は伸展位にさせたままMP関節を90度屈曲する)が表現出来ず(図3-4)、「へ」と「や」(母指と小指は伸展させて他の3指のMP関節を屈曲して指先を下に向けたり、上に向けたりする)、「ら」(示指を中指の掌側に入れて交差し、環指と小指を屈曲する)も出来ないなどである。そこで、手の所見を十分に把握し、手術方法に関する全ての選択肢を説明し、初回は関節形成術、その後2回目としてスワンソン・インプラント置換術を施行し(図3-5)、MP関節の屈曲が可能となり(図3-6)、今まで経験したことのないMP関節の可動域に大変喜んでいる。ただし、術前に理解してもらっていた様に、「ら」はMP関節の内転・外転が出来ないので形作れない。このように、手の形に関しては、人の生活と密着しているため、様々な場面での配慮が必要であることはご存知の通りである。

一方、芸術作品における手の扱いは、最初に示した私の写真の彫刻のように表現する作者もいるが、私の最も好きな芸術家の一人である佐藤忠良(1912～2011、98歳没)の手に関する400文字のエッセイから引用してこの項を終わりたいと思う。この方の作品は『群馬の人』(1952年)、『若い女の像』(1984年)『帽子』シリーズ(図4)などで有名であり、また福音館書店版の絵本『おおきなかぶ』の挿絵なども有名であることはご存じの方も多いと思う。



図4

## 「おしゃべりな手」

昔から下手な絵描きは、始末のつかぬ手を袖の中に入れ、足は袴の中へ隠して描き逃げることから「手も足も出ない」という言葉が出来たというのを何かで読んで成程と思った。

彫刻をやっている私自身、いつも手の始末に右往左往させられているものだから、なるほどと思わせられたのだった。また、演劇や舞踏を見るたびに、私自身が、手の始末に振り回されているためもあってか、その演者の空間の中での手の動きがとても気になってしまう。有名な人の肖像写真でも顎と頬の辺りで手に語らせようとしている写真が多いので、私も気を付けようと思いつながら、お恥ずかしいけれど気取った手になっている事もあって、汗顔の思いが何度もあった。老人になった今も、手が私や作品を媚びさせてはいないかの心配から逃れられずにいる。

## 第4回 手外科医のリスクマネジメント

前号まで法的な判例を引用して手外科医のリスクマネジメントを書いてきました。いくら法的にはこうであると言っても、それには限界があります。日常診療では色々な考えを持った生身の人間を相手にするわけですから、法的に線引きをする事は非常に難しいことです。そこで実際診療をなさっている先生方に心がけておられるリスクの回避法を語っていただくことにし、今号は麻生邦一先生にご執筆いただきました。

広報・渉外委員会 担当理事 **勝見泰和**

# 手外科開業医のrisk management — 私の場合 —

麻生整形外科クリニック **麻生邦一**

risk managementを考える時、私は武田信玄の言葉とされる「人は城、人は石垣、人は堀、、、」という名言(甲陽軍艦)が思い浮かぶ。堅固な城や石垣、堀を築き、戦いに臨むことより、さらに強力な守りはそこにいる人間の情である、と説いている。

九州の地方都市、人口47万人の大分市の西のはずれに無床診療所を開設して19年が経つ。職員が19名の小さな診療所である。開業してから「手外科とスポーツ」をコンセプトとしてやって来た。毎年400例くらいの外来手術を看護師とともにやっている。そのrisk managementはどうなっているのかと問われれば、年1回の看護師との医療安全委員会、年1回の感染症対策の勉強会くらいで、きちんと行っている病院、診療所に比べれば恥ずかしい限りである。ヒヤリ・ハットの報告も義務づけてはいるが、1回もそれらしき報告はない。毎日のように手術を行っているので、術前には手術の内容、麻酔方法、合併症、後療法、予後など十分に説明をして「同意書」を書いてもらっている。その有効性はあまりないらしいが、informed consentの証拠として行っている。最も困る事故としては、薬剤ショックが挙げられる。ショックが発生することは避けられない。問題は起こった時にどう対処するかである。中年の男性の強い坐骨神経痛に対して、仙骨硬膜外ブロックを行ったところ、たちまち全身痙攣、意識消失、共同偏視が生じた。ただちに手術室に運び、挿管し、麻酔器に接続し、酸素を送りながら、連携病院に応援を頼んだ。幸運にも大事に至らず回復し事なきを得た。この事の前に私の麻酔科の友人から麻酔器を設置すべきと助言を受けていたことと、昔取った杵柄で私に挿管の技術があったことが幸いしたと思っている。病歴から薬剤アレルギーの既往があったことを聴き漏らしていたことが判明し、以後は十分な聴取と手術、検査に際して皮内テストを実施するようにしている。皮内テストの意義はないとされてはいるが、手順を踏んでいることの証明として行っている。

これしきのrisk managementでは誰しも心もとないと思うが、どこまで行っても完璧なrisk

managementはありえないと思っている。最大のrisk managementとは患者との信頼関係、すなわち rapportであり、日頃から努力して作り上げるべきものであると考える。患者を友達のように、家族のように思って診療していれば、相手も自分に好意的に接してくれるようになる。そして事を隠さず正直に説明する真摯な態度が信頼を生むと思っている。医師にとって患者は自分の診療の世界の何分の1かであるが、患者にとっては医師は自分の病気の世界で唯一の存在である。その認識の違いはどうにもならないが、心に留めておくことが重要であると考え。患者から「先生は一生懸命にやったんだから許そう!」と言われるような関係が築ければ理想的である。

患者と医師、同じ人間同士で「城」を守る、この考えで良いのか、甘くはないのか、信玄公にお尋ねしたい気持ちである。

# 委員会報告

## 財務委員会

委員長 三上容司

財務委員会は、平成22年度に設置され、本年度で4年目を迎えました。本委員会の任務は、手外科学会の財務全般を管理し、健全な財務運営を行なう、あるいは、そのための提言・要望を理事会に対して行うことにあります。平成25年度のメンバーとしては、川端秀彦担当理事、根本孝一アドバイザー、三上容司委員長、島田幸造委員、中村俊康委員に新たに大江隆史委員、田尻康人委員が加わりました。外部アドバイザーは、引き続き小川正則公認会計士にお願いしております。平成25年度(平成25年2月～平成26年1月)は、平成25年4月1日に第1回財務委員会、12月21日に第2回財務委員会を開催しました。

日手会の収入は、主として会費収入、教育研修会等の開催による事業収入、専門医審査・認定に係る収入から成り立っていますが、現時点では大幅な増収は望めない状況です。これに対して、学会誌のオンライン化、委員会のweb開催等による支出の削減はあるものの、学会の多岐にわたる事業、消費税、収益事業に対する課税等、支出の増大方向への圧力が常に存在しています。また、新たな専門医制度の導入が財政面に及ぼす影響も不透明で、その行方を注視しているところです。

今後の課題は、収入面では、年会費納入率のさらなる向上、web上でのバナー広告による広告掲載料の獲得、支出面では、理事会・委員会等を可能な範囲でweb開催とすること、あるいは、支出のチェックを適正に行うことなどにより経費節減を図ることです。もちろん、学会活動の質を下げないことは大前提であります。そのために今後も委員会活動を継続していく予定ですので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

## 教育研修委員会

委員長 服部泰典

平成25年度教育研修委員会の構成メンバーは、担当理事：田中克己、アドバイザー：矢島弘嗣、委員：青木光広、澤泉卓哉、坪川直人、大井宏之、小島康宣、建部将広、鳥谷部荘八の各先生方と委員長：服部泰典でした。

当委員会の主たる活動内容は春期ならびに秋期教育研修会の運営です。第19回春期教育研修会は、アステラス製薬株式会社の協力を得て、第56回学術集会の翌日の4月20日(土)に神戸国際会議場に

て開催しました。参加人数は200名で7題の講演を企画しました。また、第19回秋期教育研修会は、8月31日(土)～9月1日(日)に開催しました。会場は東京駅前のベルサール八重洲を使わせていただき、久光製薬株式会社の協力を仰ぎました。参加人数は198名で9題の講演と症例検討会を企画しました。いずれの研修会も盛況で、実り多い研修会であったと自負しています。両研修会の講師の先生方、ありがとうございました。この場を借りて心から御礼申し上げます。

平成26年度は、第20回春期教育研修会を第57回学術集会の翌日の4月19日(土)に沖縄で、第20回秋期教育研修会を8月30日(土)～8月31日(日)に大阪で開催する予定です。また、教育研修会に加えて“第2回日手会カダバーワークショップ”を9月20日(土)～9月21日(日)に札幌医科大学整形外科教室の主催のもと札幌で行う予定です。これは、特殊な保存方法で処理されたご遺体で実際の手術のアプローチや皮弁の挙上、手関節鏡などの手技を実習するものです。平成24年の第1回ワークショップも大変好評であり、さらに魅力的な企画にしたいと鋭意準備中であります。

また、研修方法のあり方としては、第17回春期教育研修会からWeb研修会としてHP上での視聴が可能となっております。今回の参加者は61名を数えました。Web上の研修は参加できなかった方や遠隔地の方にとってはたいへん利便性の高いもので、自己研鑽の上でもたいへん有意義なものと考えております。また、新しい専門医制度においてはe-learningなどを活用した研修の場も必要になってくると考えられます。より良い研修システムの構築に向けて会員の先生方のご意見を反映できるように努めてまいりますので、今後ともご支援を宜しくお願い申し上げます。

## 編集委員会

委員長 正 富 隆

編集委員会は定例委員会を学術集会時に開催し、その後適宜メールによる意見交換を図りながらオンラインジャーナル「日本手外科学会雑誌」の査読・編集・発刊作業を担っている。今年度も第30巻を発行中であり、平成26年1月末日時点で第4号まで順調に公開されている。これも「学術集会発表論文は原則的に採用」すべく、種々のレベルの投稿論文を各編集委員が十数編ずつ何度もreviseを重ねる献身的な査読作業のお陰であり、この場を借りて深謝したい。また編集委員の査読前には、代議員の方々による一般査読の完了が必要である。代議員のご負担は重々理解しているが、年間多くても3編なので、学会への貢献と雑誌の滞りない発刊のため速やかなる査読完了をここに重ねてお願いする次第である。

オンライン投稿・査読システムの改良やオンラインジャーナルをユーザーフレンドリーに改変することは(委託業者の再検討を含め)、かねて編集委員会の検討事項である。これには学会事務局の会員管理システム等、他のオンラインシステムとの連携や効率化・セキュリティ確保と密接に関係するため、情報システム委員会での検討をまず優先しているところである。少なくとも次年度は現行システムで運用することとなっているので、その中で出来るだけコストをかけず改良・改善する方策を模索中である。

今年度はオンラインジャーナルと医中誌との連携が完了して非会員の閲覧に対する課金システム

が確立し、さらに掲載論文・図の商業的使用に対する課金制度も整備したことで、学会の知的財産を学会収入の一部に資する体制が整った。学術的使用（他誌への引用・転載など）については、申請制度・様式を整えたので事務局に問い合わせさせていただきたい。手順さえ踏んでいただければ、むろん無償で許可できる。

また学会が広告収入を得る原資として、オンラインジャーナルに掲載される会員の論文は重要である。広告掲載ニーズはホームページよりもオンラインジャーナルにおいて高く、その広告掲載システムの構築を検討中である。またその価値を向上させるためには、アクセス数の多い魅力的なジャーナルにする必要がある。今後は査読論文のみならず、特集記事や手術手技の紹介、instructional lectureなど読者の興味を抱きやすい記事の掲載についても編集委員会で検討予定である。今年度は試みとして、第56回学術集会の田中寿一会長のご協力も得て、シンポジウム「伝承したい私の手外科」、パネルディスカッション「手術する手外科開業医の楽しみと苦しみ」からお寄せいただいた御寄稿を第30巻の中に掲載すべく準備中である。

今後はより魅力的なオンラインジャーナルにするために編集委員会の役割も重くなるが、学会発展のため編集委員のみならず代議員・一般会員のご協力とご指導を心よりお願いしたい。最後に日手会オンラインジャーナルもISSN登録されたことをお伝えして委員会報告とさせていただきます。

## 機能評価委員会

委員長 大井宏之

機能評価委員会は勝見泰和理事のもと、大井宏之、織田崇、長谷川健二郎、中村俊康、佐藤彰博、山下優嗣の7名で活発な委員会活動を行っています。平成25年度の委員会は日手会時に1回、それ以外に3回のWeb会議を行っています。現委員会の最大の目標は第5版（PDF版）の早期作製です。

### 1：日手会機能評価表

平成25年8月に第4版（PDF）をHP上に掲載しました。第3版（PDF）の掲載も近日中に行う予定としています。第5版は患者立脚型評価や妥当性が検証された疾患特異的QOL評価を掲載することと、新たな測定法などをまず掲載するよう作業を進めています。

### 2：日手会報告

平成26年4月の沖縄での日手会で委員会報告を行う予定です。織田委員からはMHQの妥当性と信頼性について、山下委員からは握力測定方法と測定機器の選択について、佐藤委員からは可動域測定法などについて、大井からは第5版の方向性についての4つの報告を予定していますので、会場にいらしていただき意見をいただければ幸いです。

### 3：MHQの信頼性と妥当性の検証

織田委員を中心に検証を行っていて、その結果については日手会時に報告いたします。

#### 4: 手指再接着の日手会評価基準の妥当性検証

前、五谷委員からの仕事を長谷川委員が引き継ぎおこなっています。

#### 5: 手指可動域測定法、握力測定法

ハンドセラピー学会の機能評価委員会と協力し、佐藤委員を中心に現在作成中です。測定法(案)については、今後会員の先生方に評価していただき完成させていく予定としております。

#### 6: 指用角度計

1度刻みの角度計の必要性があり、試作品が完成したのでその検討中です。

## 国際委員会

委員長 副 島 修

平成25年度の国際委員会は、柴田実担当理事、別府諸兄アドバイザーの下で、岩崎倫政、光嶋勲、鈴木修身、田中利和、三浦俊樹、安田匡孝の6名の委員と委員長の副島修の計9名で活動を行いました。平成25年4月の第56回学術総会時に一堂に会しての会議を行い、9月および12月にweb会議を開催しました。

#### 1. Traveling Fellowの選出

例年通りに各Traveling Fellow応募者の審査を行い、理事会へ推薦しました。

##### a) JSSH-ASSH Traveling Fellow

4名の応募者の中から越智健介先生と加藤直樹先生を選出し、平成25年10月のASSHに出席して頂きました。また平成26年のASSHには8名の応募者の中より池口良介先生と浜田佳孝先生を選出し、理事会へ推薦しました。

##### b) JSSH-HKSSH Traveling Fellow

平成25年6月のHKSSHには原友紀先生に出席して頂きました。平成26年のHKSSHへは2名の応募者の中から多田薫先生を選出し理事会へ推薦しました。

#### 2. Bunnell Traveling FellowおよびHKSSH Traveling Fellowのサポート

第56回学術総会に合わせて参加されたBunnell Traveling FellowであるDr. Marco Rizzoと、HKSSH Traveling FellowのDr. Koo Siu Cheongの訪問施設選定などのサポートを行いました。また、学術総会期間中にTraveling Fellow昼食会ならびにTraveling Fellow Sessionを設けて学術交流に努めました。

訪問施設選定に関してはフェローの希望や学術総会の開催地などを総合的に勘案して決定していますが、今後は公募形式による決定も検討しています。また、各訪問施設への経済的な援助も検討中です。



### 3. Corresponding Member、Honorary Memberの推薦

今年度は特に推薦はありませんでした。委員会および理事会での審議が必要ですが、随時推薦を受け付けていますので詳細は事務局へお問い合わせ下さい。

### 4. IFSSHへの日手会活動のアピール

IFSSHのフリーウェブ雑誌であるIFSSH E-zine編集部からの依頼で、日手会の歴史や現況についての寄稿を行いました。

### 5. APFSSHへのサポート

別府諸兄先生、金谷文則先生のAPFSSH President, National Delegateへの就任と日本への事務局移転に伴い、国際委員会が中心となりサポートしていくことが提言されました。また、IFSSHおよびAPFSSH関連の予算を今年度より国際委員会が管理していくことになりました。

### 6. 第6回日米手外科学会合同会議のサポート

前回震災のために中止された会議が、今回は平成27年3月末にASSH担当でマウイ島にて開催が決定されたことに伴い、本学会を国際委員会が中心となりサポートしていくことが確認されました。

## 広報・渉外委員会

委員長 島田幸造

平成25年度の広報・渉外委員会は、勝見泰和理事、堀内行雄アドバイザー、麻田義之・垣淵正男・草野望・千馬誠悦・西浦康正委員、それに小生の7名で活動してきました。年2回の日手会ニュース(必要に応じて号外が出ます)による広報とホームページの充実が現在の主な仕事ということになります。今年度も第39、40号のニュース発刊を行いました。日手会ニュースでは以前の児島忠雄先生による児島コレクションに続き生田義和先生に「ハンドギャラリー(生田コレクション)」を寄稿していただいています。毎回の「手」に対する愛情とウイットに富んだ力作を楽しみにされている先生方も多いと思います。この場を借りて生田先生には御礼申し上げます。また、手外科医のリスクマネジメントの一助としていただきたく、勝見理事自らが中心となって最近の医療訴訟に関する話題を提供しています(第38号より)。

ホームページの充実については、まず分かりやすい入り口を、ということでデザインの統一を目指してトップページへのマイナーチェンジを行いました。その内容や使い勝手についてはまだまだ改善の余地がありますが、複数の業者の並列するコンテンツという制約もあって容易には進んでいません。費用対効果が高く、さらに見やすく使いやすいホームページを目指して内容を吟味しつつ、業者の選定作業などを行ってきました。ただし、これについては、広報・渉外委員会のみでの便宜や経済性だけを追求するものではなく、日手会全体の情報システムの一環としての広報・渉外委員会であり、またそのホームページであることから、現在情報システム委員会を中心に各委員会の横断的な枠組みのもと、新しく使いやすいものにするための作業を進めている所です。具体的には、ホームページ上でアクセスしやすいオンラインジャーナルシステムとの連携、また、それへの投稿や査読に際して便宜性の高いシステムの構築、会費納入などをできるシステムの導入、専門医制度の変更に伴う教育研修単位管理システムの構

築、さらに一般の方が「手外科専門医」を受診しやすいよう「専門医の情報をリンクさせた手外科専門医名簿」の掲載などの検討、作業を行っています。

新規事業としてこれもホームページに関連したのですが、現在の「手外科シリーズ」や「教育研修ビデオ」などをデジタル化しホームページから閲覧できるようにシステム化する作業に取りかかっています。現在はまだ調査中の段階ですが、近い将来、一般の皆様への「手外科専門医」への認知と、手外科学会員の自己管理・研鑽の両面に貢献できるよう、またこのホームページの中身が魅力あるコンテンツとしてそれ自体付加価値がつくものになるよう、次年度の広報・渉外委員会として活動してゆく所存です。

## 社会保険等委員会

委員長 吉川 泰弘

平成25年度の社会保険等委員会は、渡邊健太郎担当理事のもと、牧野正晴アドバイザー、高瀬克己アドバイザーおよび稲田有史委員、坂野裕昭委員、戸部正博委員、平瀬雄一委員、根本充委員、清重佳郎委員、代田雅彦委員と委員長として吉川泰弘、さらにオブザーバーとして佐々木孝前理事長を含めた計12名で活動を行ってきました。

今年度当初は平成26年度保険診療点数改定の要望書の期限となり、前年度実務委員の山中一良委員長が引き続き要望書を完成させ、外保連に提出しました。その内容は、手術・処置として1)手術の通則14の留意事項で指に係る同一手術野における算定方法で「の中の指(手、足)」を削除、2)手術の通則14の留意事項で指に係る同一手術野に含まれる手術として「K045 骨折経皮的鋼線刺入固定術」を追加、3)靭帯性腱鞘内注射、4)エコー下靭帯性腱鞘内注射、5)掌・背側指趾神経ブロック、6)骨折部傍骨膜神経ブロックの6項目、検査として7)知覚再教育、8)精密知覚機能検査であり、1)と2)は技術改正として、3)～8)は技術新設としての要望です。

これに基づき、平成25年8月1日に厚生労働省ヒアリングが行われ、日手会より精鋭チーム4名が出席し、保険局医療課長をはじめとする担当者へ優先順位の高い2項目1)+2)、および4)について説明しました。その結果は医療技術評価分科会(平成26年1月14日)で通則14の改正の1部(詳細は現時点では不明)について有用性が示され、先日の中医協総会(平成26年1月22日)での承認された状況です。このニュースが皆様の目に触れる頃には詳細な結果が出ていると思います。その他の要望項目については残念ながら今回の改定では対応を行わない技術とされ、今後へ持越しということになりました。

当委員会のもう一つの活動である学術集会ランチョンセミナーは、平成25年4月の第56回学術集会において牧野正晴先生による診療報酬点数の取り方の実際と他国の状況についての講演が行われ、会員の皆様から好評を得ました。今後も会員の皆様に有益な情報を学会のランチョンセミナーの形で提供できればと考えています。

保険診療の改定は平成24年度改定で手術手技の大幅改定があり、また平成26年度改定では国家財政が厳しい中、診療報酬本体では医科は改定率+0.82%となりました。しかし、その大部分は消費税率引き上げに伴うコスト増への対応分です。今後の大幅改定は厳しい状況にある中で会員の皆様のご協力をいただきながら、手外科学会からさらに有益な改定を進めていきたいと考えております。

今後も会員の皆様のご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

## 先天異常委員会

委員長 射場 浩介

今年度の先天異常委員会は、香月憲一担当理事、荻野利彦アドバイザー、高山真一郎アドバイザー、堀井恵美子委員、福本恵三委員、石垣大介委員、沢辺一馬委員、鳥谷部荘八委員と私の9人で活動してまいりました。本委員会の主な活動内容は、手の先天異常懇話会の開催、日本手外科学会先天異常分類マニュアル英語版の作成、手の先天異常症例の登録、先天異常手の機能評価基準の作成、手の先天異常症例相談窓口の開設準備などがあげられます。日常の手外科診療の中で先天異常手を治療する機会は比較的少なく、また、治療を行う施設も限られていると考えます。私達は、先天異常手を有する患者さんが全国のより多くの施設で、同じ水準で治療を受けることができるように、委員会活動を続けていきたいと考えます。

### 手の先天異常懇話会

本年度は、学術集会期間中に田中寿一会長のご配慮により、ランチョンセミナーとして学会2日目のお昼の時間帯にプログラムとして取り入れて頂きました。今回は「母指多指症」をテーマに例年と同様に症例検討形式で開催しました。参加者は例年の2倍以上の170名を超え、症例検討では非常に活発な討論が行われました。今後もこの会の発展を目指して努力したいと思います。

今回の懇話会については「第51回先天異常懇話会症例報告」として、日手会雑誌(2013年第30巻第2号)に掲載しています。

### 手の先天異常分類マニュアル英語版、改訂版の作成

現在、手の先天異常分類マニュアルはホームページからダウンロード可能となっています。英語版につきましても堀井前委員長のご努力ですでに完成しており、雑誌への掲載準備を進めています。また、改訂版の作成につきましても現在、検討を開始しています。

### 手の先天異常症例の登録

高山真一郎アドバイザーの精力的な活動のおかげで裂手症関連症例の登録を完了し、現在は集まった症例の解析を進めています。また、解析結果の一部は第52回手の先天異常懇話会にて報告予定です。

### 先天異常手の機能評価基準の作成

新しい先天異常手の機能評価基準作成に関する研究の一環として、「FDTを用いた橈側列形成障害患者の手指機能評価 一前向き研究一」を開始しています。現時点での登録症例数はまだ少ないですが、研究は継続中です。

### 手の先天異常症例相談窓口の開設

ホームページ上で手の先天異常症例の相談窓口を開設することを予定しています。現在は具体的なホームページ掲載時期につき広報・渉外委員会と相談しながら、準備をすすめています。

今後とも皆様のご支援、ご指導の程よろしくお願い致します。

## 倫理・利益相反委員会

委員長 池上博泰

当委員会は、砂川融担当理事、塚田敬義アドバイザー、西田淳委員、吉田健治委員、根本充委員、山我美佳外部委員、深谷和子外部委員と委員長の私の8人体制で活動しております。

主な活動内容は、新規学会入会希望者の審査と学術研究プロジェクトの倫理審査、利益相反に関する活動です。特に、利益相反に関する活動については、日本手外科学会が日本医学会の分科会として承認された平成24年から当委員会が利益相反委員会を兼務することになりました。平成25年には、日本手外科学会COI関連文書(1. 日本手外科学会における事業活動の利益相反(COI)に関する指針、2. 日本手外科学会における事業活動の利益相反に関する細則、様式1\_役員等の利益相反自己申告書、様式2\_筆頭演者の利益相反自己申告書、様式3\_日本手外科学会雑誌:COI自己申告書、様式4\_誓約書、記入例、Q&A)が完成しました。これらの文書は、学会ホームページの医療関係者の皆様のページから参照することができます。

### 1. 入会審査

入会審査対象者は、正会員136名、準会員17名であり、審査の結果、書類不備の1名以外は“承認”として理事長に答申しました。

### 2. 倫理審査

学術研究プロジェクトの応募研究の倫理審査

学術研究プロジェクトに採択された2件の研究の倫理審査は、メールによる討議によって審査を行いました。最終的な審議の結果、2件とも条件付き承認として理事長に答申しました。

### 3. 利益相反に関する活動

前述したように、日本医学会は平成23年2月23日に“日本医学会 医学研究におけるCOIマネジメントに関するガイドライン”を公表し、関連分科会が産学連携による会員の医学研究に関連して関係企業との金銭関係を自己申告で開示するルールを提示し、マネジメントのあり方について提案しています。さらに平成25年11月15日には、第4回日本医学会分科会利益相反会議が行われ、当委員会を代表して私が出席しました。また第5回が平成26年2月28日に行われる予定ですので、こちらも委員長の私が出席する予定です。

これらを踏まえて当委員会では、日本手外科学会COI関連文書を作成し、平成25年からは学会役員、委員会委員などCOI関連文書を提出しなければならない関係各位から文書を提出してもらい、平成25年6月8日に一堂に会して審査を行いました。11名の先生の書類に不備があったので、再提出をお願いして審査結果を理事長に答申しました。

皆様ご存知の通り、医療用高血圧治療薬の治験に絡んだデータ改ざん疑いなども絡んで、世間的にはこの医学研究とCOIという関係に多大な注目がされています。このような状況下で、当委員会の果たす役割はますます大きくなっていますので、さらに気を引き締めて委員会活動をしていきたいと考えています。皆様のご協力、ご指導・ご鞭撻が不可欠ですので、どうぞよろしくお願いたします。

# 学術研究プロジェクト委員会

委員長 柿木良介

## 構成

日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会の構成メンバーは、亀井譲担当理事、柿木良介委員長、磯貝典孝委員、稲垣克記委員、内田満委員、中土幸男委員、長岡正宏委員です。

## 活動内容

### 1. 平成25年度学術研究プロジェクトの選考

平成25年12月8日ステーションコンファレンス東京にて、平成25年度学術研究プロジェクト選考委員会を開催し、平成25年度の日本手外科学会学術プロジェクトの選考を行ないました。4名の応募がありましたが、東京医科大学茨城医療センター地域医療人材育成寄附講座・整形外科 吉井雄一先生の「末梢神経の歪み計測のための接触圧モニター式自動振動制御システムの開発」と相澤病院整形外科 山崎宏先生の「橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート術後における屈筋腱皮下断裂のリスク評価～屈筋腱の滑走時礫音の周波数解析からの検討」の2題が選ばれ理事会で承認されました。

### 2. 学術研究プロジェクト進捗状況報告書のチェック

日本手外科学会学術研究プロジェクトに選ばれますと、毎年プロジェクト研究の進捗状況を報告し、プロジェクト終了から1年以内に、プロジェクトの結果を日本手外科学会学術集会で発表し、かつ日手会誌もしくはHand Surgery誌で公表することが義務づけられております。なお日手会誌には、自由投稿論文として発表していただくようお願いしております。研究者からの報告書を委員で分担し、研究の進捗状況、助成金の使途、学会報告、論文報告をチェックしております。進捗状況報告書の未提出、学会未発表、論文未掲載に関しては、研究者の氏名を公表し、当分の間プロジェクト提出医療機関、施設からのプロジェクトを受け付けないなどのペナルティーも検討しておりますのでご注意ください。

### 3. 日本手外科学会学術研究プロジェクト委員会主導の研究テーマ

平成26年度より、個人からご提案いただくプロジェクトのみならず、学術研究プロジェクト委員会が研究テーマを提示して、そのテーマに沿った研究プロジェクトの募集が理事会で承認されました。また学術研究プロジェクト委員会指定のプロジェクト課題に関しては、複数年度にわたるプロジェクトの認定及び研究資金の提供も可能とすることも考えています。近々プロジェクト委員会主導の研究テーマが公表される予定です。多数のご応募をお待ちしています。

今後とも、学術研究費の有効利用と手外科研究者のモチベーションの向上につながるプロジェクトの実施を目指し努力いたします。皆様のご指導、ご鞭撻の程お願い申し上げます。

## 専門医制度委員会

委員長 田中克己

### ◇委員会構成

本委員会は専門医制度を統括する目的で、他の各種委員会との連携のもとに活動を行っています。

平成25年度のメンバーは田嶋光担当理事、土井一輝アドバイザー、落合直之委員、亀井譲委員、川端秀彦委員、柴田実委員、鈴木茂彦委員、砂川融委員、牧裕委員、牧野正晴委員と委員長の田中克己です。落合理事長をはじめ、全員が専門医制度の骨格を担っている他の委員会との掛け持ちをお願いしております。

### ◇活動内容と今後の方針

一般社団法人日本手外科学会の専門医制度は平成25年7月1日から基盤学会である公益社団法人日本整形外科学会と一般社団法人日本形成外科学会の2階にのるsubspecialtyとして正式に認められました。このことは日手会ニュース第40号で落合直之理事長より詳細に報告されています。

また、皆様ご存じのように、これまでの社団法人日本専門医制評価・認定機構に代わり、本年4月からは第三者機関である新しい日本専門医機構(仮称)が設立されます。本年1月には専門医制度整備指針も公表されました。現時点では、日本手外科学会専門医制度は新制度においても認定・更新要件に関する大幅な変更はないと考えておりますが、新制度における研修カリキュラム、研修プログラム等に対応すべく引き続き検討してまいります。

今後のタイムスケジュール(予定)ですが、

平成26年4月：日本専門医機構(仮称)が発足

基本診療領域(日本整形外科学会・日本形成外科学会)の専門医制度整備基準の認定作業開始

平成28年4月：基本診療領域(日本整形外科学会・日本形成外科学会)の専門医制度整備基準に準じた専門医研修プログラム公表

平成29年4月：新制度下における基本診療領域の研修開始

平成33年4月：新制度下における基本診療領域の専門医認定  
同時に新手外科専門医研修開始

手外科学会における新しい専門医制度への完全移行は数年先の話ではありますが、それまでに新制度に向けて円滑な移行を行わなければなりません。また、基盤学会である日本整形外科学会ならびに日本形成外科学会と緊密な連携をとり、研修プログラムの策定等を進める必要があります。

現状を把握する目的で、平成25年9月に日手会基幹研修施設を対象に「専門医制度研修プログラムに関するアンケート」を実施しました。基幹研修施設328施設に依頼し、309施設から回答をいただきました。回答率94.2%と高い数字は各施設の先生方の今後の専門医制度のあり方に強い関心があるものと考えております。この結果についてはあらためて各施設にお送りする予定です。ご回答ください

た施設の方々にはこの場をお借りして御礼申し上げます。

手外科学会の専門医制度は手外科医の高い専門性と質を担保し、国民の健康に寄与するものでありますが、同時に手外科医自身にとりましても不利益の生じないようなものでなければなりません。専門医制度に関しても、今後数年が本制度を盤石なものにするための重要な時期であると考えております。会員諸氏のさらなるご支援、ご協力をお願い申し上げます。

## 専門医資格認定委員会

委員長 中道 健一

平成25年度の資格認定委員会は、鈴木 茂彦担当理事、中島 英親アドバイザー、秋田 鐘弼、近藤 真、中尾 悦宏、仲沢 弘明、村松 慶一委員で専門医新規申請および更新申請書類の審査を行いました。

平成25年5月14日にWeb会議を行い、専門医更新申請の審査、ならびに再入会の扱いについて検討いたしました。

筆記試験合格後、更新申請書を提出されなかった33名に更新の希望有無について確認し、10名の先生から更新希望の回答をいただきました。

更新申請書類提出者10名のうち、8名を合格、教育研修講演単位不足の2名は第57回日手会学術集会終了時(平成26年4月18日)までに必要単位を取得することを条件に合格といたしました。

再入会者の過去の入会実績は、検討の結果、細則で「申請時において5年以上引き続き本学会の正会員であること」と定められているため、再入会から5年後に専門医申請資格を得ることとし、過去の入会歴を認めないことといたしました。

尚、専門医資格の更新を迎える対象者に対して、申請期限の2年前と1年前に文書およびメールで単位取得状況ならびに書類申請日程(予定)を通知することが決定いたしました。

第6回手外科専門医試験受験資格認定申請については、39名から申請書類の提出がありました。事前審査を経て平成25年12月18日にWeb会議で審査の結果、書類審査合格21名、書類審査合否判定保留15名、書類審査不合格3名といたしました。なお、合否判定保留者については、事務局から不備書類の再提出および不備事項の問い合わせ等を行い、その結果を踏まえ平成26年1月19日の委員会にて最終的に書類審査合格37名、不合格2名としました。

平成25年度専門医更新申請については、更新対象者100名のうち93名から申請書類の提出がありました。事前審査をもとに上記Web会議で審議の末、更新認定92名、教育研修講演単位不足による書類審査合否判定保留1名としました。なお、合否判定保留者については、事務局から次回委員会前日までに不足単位を取得することを条件に更新を認める旨を通知し、平成26年1月19日の委員会にて最終的に更新認定は94名としました。

この他、専門医制度細則の変更に対し新規あるいは更新資格の有無について様々なお問い合わせがあり、これらについても対応いたしました。

最後になりましたが、事務局の皆さまには大変お世話になっております。この場をお借りして深く御礼申し上げます。

## 施設認定委員会

委員長 石川 浩三

平成25年度は、内山茂晴前委員長が任期満了で退任し、石川が委員長を引き継ぎました。委員会メンバーは、担当理事が川端秀彦、委員は沖永修二、島田賢一、谷口泰徳、江尻荘一、尼子雅敏、石川浩三の計7名です。

主な活動内容は、施設認定作業とそれに伴う判定基準の検討です。今年度は、申請時期の見直しを前委員長からの引継ぎで行い、更新申請時期は9月から11月にまとめる事として、ホームページに掲載しました。これに伴い認定作業時期は12月に行い、1月の理事会で承認を得る段取りとしました(1月が年度末となるため)。この申請期間における申請数は、更新審査が20件(基幹研修施設16件認定、関連研修施設4件認定)、新規審査が19件(基幹研修施設15件認定、関連研修施設2件認定、認定されなかった施設が2件)でした。この更新期間については昨年度に変更された定款施行細則第6号専門医制度細則第25条を参照してください。今年度末までは、年間を通して3年ごとの更新審査をばらばらに行なっていましたが今後は上記のように更新時期をまとめますのでご理解の程よろしくお願いたします。ちなみに平成25年度の審査件数は合計で257件、そのうち251件を認定承認しております。

新規審査に伴う問題点として多いのは、専門医の在籍期間に関するものです。専門医取得して在籍1年経過すれば、その施設で申請は可能です。ただしその施設が認定要件を満たすことが条件です。異動特例で、専門医が赴任した施設においても同様です。ただし前在籍施設が認定施設であったことが条件になります。専門医の留学後についても異動特例と同じ考え方です。FAQにも追加しましたのでご覧ください。申請の際には定款施行細則第6号専門医制度細則第20条の認定施設基準をよくご確認下さい。とくに必須項目がクリアできていない申請がありますのでご注意ください。

書類が多くて面倒とのご指摘も頂いておりますが、日本手外科学会専門医制度の充実のためにご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

## 専門医試験委員会

委員長 鈴木 克侍

### 1) メンバー紹介

平成25年度のメンバーは、担当理事 田中克己先生、アドバイザー 清水弘之先生、委員 新井健先生、有野浩司先生、池田全良先生、岩崎倫政先生、國吉一樹先生、酒井昭典先生、瀧川宗一郎先生、武石明精先生、長谷川健二郎先生、委員長 鈴木克侍です。下線の4名が入れ代わった新委員です。いずれも教育現場の経験豊富な先生で試験問題作成に習熟されています。

### 2) 活動1: 過去問1年分の公開

受験者より要望の多かった過去問1年分を全問ホームページに公開しました。ホームページの『医療関係者の皆様』より入り、『2013.10.11. 日手会専門医試験1年度分を公開』を御覧下さい。そのなかの



『PDF資料1～3』もぜひ御覧下さい。

- ① 筆答試験44問(88点)と口頭試験2問(12点)で100点満点であること
- ② 合格の目安が60点であること
- ③ 筆答試験の設問文に対する解答方法が詳述してあること
- ④ 口頭問題は委員会用意問題(8点)と受験者提出症例問題(4点)の2問であること
- ⑤ 委員会用意口頭問題は4症例有りそのなかから受験者が試問を受けたい1題を選択する方式であること

など受験者が準備をしやすい情報が満載されています。

### 3) 活動2: 第6回専門医試験問題作成

専門医試験委員会は資格試験にふさわしい良問を作成すべく、年に6回の委員会を開催しています。今年度は12月23日の委員会(毎年恒例で天皇誕生日に開催されている)で筆答問題44題と口頭問題4題を完成させることができました。あとは、問題の誤字脱字等のチェックや、受験者と口頭試問者の所属が一致しないように調整するなどの作業をすすめていきます。

### 4) 活動3: 第6回専門医試験開催

平成25年度の第6回専門医試験は昨年度と同様に平成26年3月21日(春分の日)に東京駅のステーションコンファレンス東京で開催されます。午前中に筆答試験(70分)、休憩をはさんで午前から午後にかけて口頭試験が行われます。午後2時には最後の口頭試験が終了する予定です。今回は受験者が39名の予定ですので、委員会メンバー12名と事務局員で対応できそうです。受験者が多いときには東京地区の代議員に口頭試問者をお願いすることがございます。その節は御参加、御協力を宜しくお願い申し上げます。

以上、専門医試験委員会メンバーは会員の皆様が納得できる試験問題を作成し、試験を開催すべく尽力いたしております。しかし、マンパワーが不足しているところもございます。会員の諸先生方の御助力が必要なときにはお願いに上がりますので、お力添えを宜しくお願い申し上げます。

## カリキュラム委員会

委員長 松下和彦

カリキュラム委員会は、牧裕担当理事、内田満、長田伝重、沢辺一馬、松村一、森友寿夫の5名の委員と委員長の松下和彦の計7名で構成しています。

主な活動内容は、まず申請された教育研修講演の審査・認定作業を行うことです。平成25年2月から平成26年1月までの申請件数は283件で、認定274件、非認定9件でした。非認定の理由は、①講演の内容が、肩関節疾患など研修カリキュラムに含まれていない疾患を対象としたものが8件、②申請期間を過ぎていたのが1件でした。これらの審査・認定作業はメールによる審議で行っています。

次に、Web登録委員会から本学会のカリキュラム対応疾患一覧表と日本形成外科学会の症例登録データベースとの整合性を果たせるようにとの依頼があり、修正案を作成し提出いたしました。

教育研修講演の審査・認定などでご意見、ご質問などございましたら、ご遠慮なく事務局におよせ下さい。委員会で検討させていただきます。

## 情報システム委員会

担当理事 **勝見 泰和**

情報システム委員会は情報技術(以下IT) 関連の予算が巨額になってきていることから、限られた財源の効率的な運用を目指して、平成25年1月の理事会にて特別委員会として新設された。理事長、財務委員会、広報・渉外委員会、編集委員会、専門医制度委員会、教育研修委員会、Web登録委員会の担当理事および委員長などが構成メンバーとして選出された。その後、将来を見据えた情報管理システムの構築には、情報システム委員会は理事会直轄が妥当と考えられ、常置委員会となった。

平成25年4月の第1回情報システム委員会では、IT関連事業の問題点の整理から始めた。現状のホームページや会員管理システムは、コア社、京葉コンピューターサービス社(KCS社)、ミス・ワン社の3社が複雑に関わっており、会員データをKCS社と事務局のサーバーで二元的に管理することは非効率であり、一元化が急務という意見に集約された。また中立的な立場のシステムエンジニア(SE)の助言が必要とされ、筑波大学データセンターのSEに依頼する事となった。そのほか、オンライン査読・ジャーナルの改良、Web登録・e-learningなどのシステム構築が検討項目とされた。

平成25年7月の第2回情報システム委員会では、上記の目的から業者によるプレゼンテーションが行われた。会員データの一元化ではミス・ワン社・KCS社、オンライン査読・ジャーナルの改良ではKCS社・アトラス社・エムケイシステム社、Web登録・e-learningなどのシステム構築についてはJAPACOCO社・三菱商事によりプレゼンテーションが行われた。これらのプレゼンテーションとは別途に、編集委員会から新しくオンラインジャーナル上での電子広告収入を獲得するシステム構築の計画があり、実現の可能性が高いと報告があった。

その後広報・渉外委員会は費用対効果の観点から、会員管理システムの一元化としてミス・ワン社の会員管理システムを推薦する提案があった。また編集委員会から、ミス・ワン社では現行のオンライン投稿査読、閲覧システム、および計画中の電子広告システムが使えなくなるため、電子広告収入を獲得できるKCS社のシステムを推薦する提案があった。稟議書による理事会審議では広報・渉外委員会案が否決され、編集委員会案が採択された。

理事会審議の結論に従って、平成26年度情報システム委員会では、電子広告収入を見込んだ多年度にわたるITによる会員管理システム構築の全体像を検討することとなった。また各委員会からの平成26年度IT関連予算案については、年会費などの収入により執行できるものとし、各予算案にそれぞれ優先順位をつける予定とした。

## 用語委員会

委員長 松村 一

用語委員会は、田嶋 光担当理事のもと、浦部 忠久先生、面川 庄平先生、田中 英城先生、根本 充先生、そして小生の5名の委員にて活動しております。「手外科 用語集 改訂第4版」が平成24年4月に発行されており、本委員会では、次の用語集の改訂をどのような形で行うかに関して審議し、実作業を行っております。

今後の用語集をどうするかに関しては、大きく2つの課題があります。一つ目は、これまでのような冊子とした用語集を残していくのか、また、電子版のみとしていくのかは、非常に大きな問題であります。これに関しては、デジタル化の費用対効果や会員の方の用語集の使い方等々をよく吟味することが必要であり、用語委員会のみで方向性を決定できる問題ではありません。このため、理事会でも議論いただいている最中であります。また、すでに冊子となっております改訂第4版に関しては、web上で検索可能な形で会員に提供するよう作業中であります。

もう一つの課題は、今後の用語集にどのような用語を採用、追加していくかです。これに関しては、手外科の教科書といえる“Green's Operative Hand Surgery sixth edition”の索引語から、手外科用語集に追加すべき用語を検討中であります。索引ページは3段組で60ページあり(13,000行以上)、相当な語数であります。索引の用語と用語集に収録すべき用語に違いがありますので、どのような用語を採用していくが、委員全員で現在思案中であります。平成26年前半までに追加用語を確定し、その後に、対訳の作成、用語集の他の用語との整合性を図る作業を予定しております。

この他の課題としては、日本医学会医学用語辞典との併合に関して、日本整形外科学会、日本形成外科学会を含めた関連学会の用語集との整合性をいかに取るかも今後の課題であります。

このように、用語委員会は、非常に実作業の多い委員会であり、委員の方に大きな負担をお願いしているのが現状ですが、手外科用語集がより良いものとなるよう全委員、全会員とともに進んでいきたいと考えております。

## Web 登録委員会

委員長 牧野 正晴

### 【目的】

日本手外科学会専門医制度細則に則りweb登録システムを構築。ペーパーレス化を図り、専門医申請および更新に必要なデータ入力および管理を全てWebシステム上で行いそれらの作業の合理化を図る。

### 【現在までの活動】

- Web登録委員会は、平成23年1月9日日本手外科学会臨時理事会において新規委員会として承認された。現在まで4回の委員会を開催し、それ以外の専門医制度合同委員会にもすべての委員が参加した。また、適宜e-mailでの情報交換を行ってきた。

## 【今年度の活動】

- 日本形成外科学会の症例データベースの取り込み準備として、形成外科学会理事会承認を得て、疾患マスタ等をいただき、日手会カリキュラム委員会での検討・承認を経て、不足していた疾患等を取り込んだ日本手外科学会専門医制度カリキュラム改訂版を作成した。

- Webサイトの構築

試作デモデータを作成した。帳票完成以前であるため準備段階であるが、以下のサイトからシステムの概要を確認することができる。サンプル図を後に示す。

<https://qhs-jssh.appspot.com/Menu/MainMenu.jsp>

メールアドレス：jsshguest      パスワード：jsshguest

画面構成は専門医制度細則の帳票様式と同じとする。

以下は、現在開発中の様式2-2：専門医資格更新審査表の説明。症例数、出席回数、単位等不足しているところは赤字で表示。

- 資格

必須項目に入力ミスや未入力があった場合には、赤字でエラー表示。

- 担当症例

様式2-5：症例一覧表より自動記帳。

- 学会・教育研修会等参加回数

様式2-6：学会・教育研修会参加等一覧表より自動記帳。

- 学会・教育研修会等单位

様式2-6：学会・教育研修会参加等一覧表、様式2-7：学会発表一覧表、様式2-8：論文発表一覧表、様式2-9：講演一覧表より自動記帳。

## 【今後の活動予定】

- 基本領域(1階建て部分)の専門医制度である日本整形外科学会、および日本形成外科学会の専門医制度の新しいバージョンが平成25年度から検討が開始されている。

これらの進行に合わせて、いわゆる2階建て部分のsubspecialty学会である日手会の専門医制度を1階建て部分のそれらとの整合性を考えてシステムの改訂、入力方法の見直し等を進める。例えば、1階建て部分の情報入力と重複できる手外科専門医情報は入力時にクリックひとつで同時入力し管理できる等の専攻医、専門医の負担をできるだけ軽減する合理的なシステムの構築を行う予定である。

- 今まで各学会で独自に運営されてきた専門医制度が、第三者機関としての日本専門医(制)機構(名称未定)の認可が必要となり、認定後には自動的に「広告のできる専門医」になる方向性が示されている。機構の専門医制度整備指針に合致した内容を登録できるシステムを構築する努力が今後、なおさら必要とされる。

- Home
- ログアウト
- 管理者メニュー
- 手順
- ユーザー登録
- ← 資格更新 →
- 提出書類チェックシート
- 更新認定申請書
- 更新審査表**
- 施設一覧表・診療実績証明書
- 症例一覧表
- 学会・教育研修会参加等一覧表
- 学会発表一覧表
- 論文発表一覧表
- 講演一覧表
- ← 資格取得 →
- 認定申請 提出書類チェックシート
- 専門医認定申請書
- 専門医研修記録総合成績表
- 施設一覧表
- 指導専門医一覧表
- 学会・教育研修会参加等一覧表
- 学会発表一覧表
- 論文発表一覧表
- 講演一覧表
- 症例一覧表
- 研修カリキュラム対応疾患一覧表
- 検査一覧表
- 研修カリキュラム対応検査一覧表
- 処置一覧表
- 研修カリキュラム対応処置一覧表
- 病歴要約集出症例記録
- ← その他 →
- 専門医制度詳細
- 研修カリキュラム一覧表
- 確認メール再送信
- パスワード送信
- FAQ
- 対応ブラウザ
- 個人情報保護
- 問い合わせ

日本手外科学会 専門医資格更新審査表  
 専門医番号 2222  
 氏名 手外科 太郎

資格	記入欄	必要	単位	備考
更新年月日	2013年			
日整会 専門医資格	<input checked="" type="radio"/> あり <input type="radio"/> なし		有無	基盤学会専門医であること
取得(更新)年月日	1990/04/01			yyyy/mm/dd形式の西暦で
専門医番号	111111			
日形会 専門医資格	<input checked="" type="radio"/> あり <input type="radio"/> なし		有無	基盤学会専門医であること
取得(更新)年月日				yyyy/mm/dd形式の西暦で
専門医番号				
日手会入会年月日	1980/04/01			yyyy/mm/dd形式の西暦で
日本手外科学会会員在籍	396	60	カ月	引き続きいて5年間(60ヶ月)会員であること
会員番号	123456			
<b>担当症例</b>				
担当症例	13	150	例	症例一覧表
<b>学会・教育研修会等参加回数</b>				
本学会学術集会参加回数(5年間)	3	2	回	学会・教育研修会参加等一覧表
<b>学会・教育研修会等単位</b>				
教育研修講演受講	14	25	単位	学会・教育研修会参加等一覧表
学会または研修会参加 ※	32	16	〃	
学会発表(主演者に限る) ※	6	--	〃	学会発表一覧表
論文発表(主著に限る) ※	2	--	〃	論文発表一覧表
講演 ※	2	--	〃	講演一覧表
<b>単位 計</b>	39	50	単位	
※教育研修講演受講単位以外は合計で25単位まで算入				
資格喪失要件の有無	<input type="radio"/> あり <input checked="" type="radio"/> なし		有無	
理由				
更新期間延長	<input type="radio"/> あり <input checked="" type="radio"/> なし		有無	
理由				

途中登録 登録

専門医資格認定委員会	試験委員会	理事会	理事長
□	□	□	□

様式2-2：専門医資格更新審査表

## 手外科専門医育成委員会

担当理事 柴田実

本年度の検討項目はございません。

## 定款等検討委員会

委員長 河井秀夫

本年度の検討項目はございません。

## 役員選挙管理委員会

委員長 和田卓郎

役員選挙管理委員会は落合直之理事長のもと、信田進吾先生(東北労災病院)、福本恵三先生(埼玉手外科研究所)、大江隆史先生(名戸ヶ谷病院)、藤岡宏幸先生(兵庫医療大学)、石田治先生(広島市民病院)、和田卓郎(札幌医大)の6人の委員から構成されます。

去る平成25年9月8日にWeb会議を行い、役員選挙に関するスケジュールを確認しました。9月30日に選挙に関する告知が日手会ホームページ上にすでになされています。平成26年3月1日には立候補届出が開始されます。4月上旬に委員会を開催し、4月9日には立候補者氏名を代議員に通知する予定です。もし選挙が実施されるようであれば、選挙に関する管理事務を委員会が担当することになります。

日手会の指導者を選出する大切な選挙が遂行できるよう、委員会として最善を尽くします。

## 代議員選挙管理委員会

委員長 吉井雄一

このたび定款に従い、平成24年に続き第2回目の代議員選挙が行われましたので報告いたします。

今回の選挙管理委員会は、前回同様12名の委員で構成されました。北海道・東北地区から本宮真・湯川昌広、関東地区から土原豊一・吉井雄一、中部地区から洪淑貴・森谷浩治、近畿地区から長尾由理・山本浩司、中国・四国地区から守屋淳詞・四宮陸雄、九州・沖縄地区から入江弘基・岳原吾一(敬称略)が選出されました。

平成25年9月17日に第1回選挙管理委員会Web会議が行われました。その際、選挙管理委員長の選任、代議員選挙告示事項の確認を行いました。その後、各選挙管理委員により地区ごとの有権者名簿の確認が行われました。立候補届出期日前に、当初の選挙管理委員であった森谷浩治氏と湯川昌広氏が代議員選挙に立候補することになったため、選挙管理委員を退任することになりました。後任として坪健司氏と山下晴義氏が選挙管理委員に選出されました。この過程で選挙管理委員長の改選が行われ

ました。平成25年10月1日～31日まで立候補届出を受け付け、その後平成25年11月15日まで立候補辞退届を受け付けました。平成25年11月27日に第2回選挙管理委員会Web会議が行われ、地区別代議員立候補状況の確認、代議員選挙立候補者公示文書の検討を行いました。この結果、代議員定数248名に対して立候補者数248名で、定数内におさまることが確認され、立候補者は選挙をすることなく全員が当選することに確定しました。

第2回代議員選挙前の代議員数は233名であったので、今回、全体で15名の代議員の増員があったこととなります。これは各地区における正会員数の増加に伴うものです。地区別では、北海道・東北地区で+1名、関東地区で+4名、中部地区で+3名、近畿地区で+2名、中国四国地区で+3名、九州・沖縄地区で+2名でした。定款第13条第1項に「代議員数は250名以内とし、これを各地区の正会員数に按分比例して割当てる」とされています。次回以降、会員数の増加に伴い代議員定数が上限の250名に達する可能性があり、これに伴う地区定数の調整が必要になるものと予測されます。

この場を借りて代議員選挙が滞りなく行えたことを報告し、会員の皆様のご協力を深謝いたします。

# 日本手外科学会学術集会 等

## ◆第57回日本手外科学会学術集会◆

会 期：平成26年4月17日(木)～18日(金)  
会 場：沖縄コンベンションセンター  
会 長：金谷 文則(琉球大学医学部 整形外科学 教授)  
詳 細：<http://www.okinawa-congre.co.jp/57jssh2014/index.html>

.....

## ◆第20回春期教育研修会◆

会 期：平成26年4月19日(土)  
会 場：沖縄コンベンションセンター A1会場  
主 管：日本手外科学会教育研修委員会  
詳 細：<http://www.jssh.or.jp/doctor/jp/meetings/instructionalcourse.html>

.....

## ◆第20回秋期教育研修会◆

会 期：平成26年8月30日(土)～31日(日)  
会 場：ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター(大阪府)  
主 管：日本手外科学会教育研修委員会  
詳細は決定次第、学会ホームページに掲載します。

.....

## ◆第2回日本手外科学会カダバワークショップ◆

会 期：平成26年9月20日(土)～21日(日)  
会 場：札幌医科大学北1講義室、解剖実習室  
主 催：札幌医科大学整形外科学教室  
協 力：一般社団法人日本手外科学会  
詳細は5月上旬に学会ホームページに掲載します。



## 関連学会・研究会のお知らせ

### ◆第57回日本形成外科学会学術集会◆

会 期：平成26年4月9日(水)～11日(金)  
会 場：長崎ブリックホール、他  
会 長：平野 明喜(長崎大学医学部 形成外科学 教授)  
詳 細：<http://www.c-linkage.co.jp/jsprs57/>

.....

### ◆第87回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：平成26年5月22日(木)～25日(土)  
会 場：ポートピアホテル、神戸国際会議場、神戸国際展示場  
会 長：黒坂 昌弘(神戸大学大学院医学研究科・外科系講座・整形外科学 教授)  
詳 細：<http://www.joa2014.jp/index.html>

.....

### ◆第27回日本臨床整形外科学会学術集会◆

会 期：平成26年7月20日(日)～21日(月・祝)  
会 場：仙台サンプラザホール・仙台サンプラザホテル  
会 長：湊 昭策(山王整形外科医院 院長)  
詳 細：<http://www.jcoa27.com/>

.....

### ◆第25回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：平成26年8月29日(金)～30日(土)  
会 場：ホテル ルビノ京都堀川  
会 長：中川 正法(京都府立医科大学大学院 医学研究科 教授)  
詳 細：<http://jpns25.umin.jp/index.html>

.....

### ◆第29回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成26年10月9日(木)～10日(金)  
会 場：城山観光ホテル  
会 長：小宮 節郎(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科整形外科学 教授)  
詳 細：<http://kiso2014.umin.jp/>

.....

### ◆第23回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：平成26年10月9日(木)～10日(金)  
会 場：松本文化会館  
会 長：松尾 清(信州大学医学部形成再建外科学講座 教授)

◆第25回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：平成26年11月27日(木)～28日(金)  
会 場：ヒルトン東京ベイ(千葉県浦安市舞浜)  
会 長：亀ヶ谷 真琴(千葉こどもとおとなの整形外科 院長)

.....

◆第41回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：平成26年12月4日(金)～5日(土)  
会 場：京都府民総合交流プラザ京都テルサ  
会 長：柿木 良介(京都大学大学院医学研究科整形外科 准教授)  
詳 細：<http://www.acplan.jp/jsrm41/index.html>

.....

◆第27回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：平成27年2月13日(金)～14日(土)  
会 場：沖縄コンベンションセンター  
会 長：金谷 文則(琉球大学医学部 整形外科学 教授)

.....

◆第29回日本医学会総会 2015関西◆

会 期：平成27年4月11日(土)～13日(月)  
会 場：国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都、京都大学百周年時計台記念館、  
京都大学医学部芝蘭会館  
会 頭：井村 裕夫(京都大学名誉教授・元京都大学総長)  
詳 細：<http://isoukai2015.jp/>

---

## 編集後記

---

立春を過ぎたというのに、北国の日本海側ではどんよりとした鉛色の雲の下で、冷たい風に雪が舞っております。巷ではアベノミクスとやらで好景気の子感がありますが、医療機関には厳しい消費税8%への増税が待っています。診療報酬の改定にもあまり期待ができず、頭を痛めている会員も多いと察します。そんな中で、ソチ五輪での日本選手活躍のニュースは、明るい話題を届けてくれました。弛まぬ努力を積み重ね、計り知れない重圧の中で戦う姿に感動しました。

広報・渉外委員会からも、ホームページをより充実させ、日手会ニュースで明るい話題を提供できますように、メンバー同取り組んでいきます。

(文責：千馬誠悦)

---

広報・渉外委員会

(担当理事：勝見泰和，アドバイザー：堀内行雄，委員長：島田幸造，  
委員：麻田義之，垣淵正男，草野 望，千馬誠悦，西浦康正)